

## 第1章 偏見的態度

態度とは、ある対象に対する好き嫌いの評価を伴う反応傾向であり、態度のひとつに偏見がある。偏見とは、個人、集団、職業、人種などに対する不十分な根拠に基づく否定的態度のことである。伊藤・田川（1967）は、偏見には歴史的な社会的基準、偏見をもちやすい人の性格特徴、直接的接触に基づく感性的認識などの心理的メカニズムが関係していると考察した。

## 第2章 研究史

知的障害児・者に対する態度に関する研究は、我が国においても1960年以降、数多く行われている。研究の多くは、接触経験や知識の吸収によって、知的障害者に対する健常者の意識や態度が、好意的方向へ変化していくという結果を述べている。知的障害者に対する態度形成に及ぼすと考えられる要因として性、接触経験、知識があげられている。

## 第3章 調査

### 目的

本研究の目的は、知的障害者に対する態度が、知的障害者についての知識と接触経験の影響、性・専攻の影響を調べ、検討することである。

### 方法

淑徳大学の学生など400名を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙は生川・那須（2001）の調査内容を参考にして作成した。

### 結果・考察

分析の結果、知的障害者に対する‘参与意思’と知的障害者の‘能力肯定’の2因子を抽出した。‘参与意思’においては、接触経験、ボランティア経験、知識、講習参加が多くなるほど、知的障害者に対する好意度が高くなることが見出された。‘能力肯定’においては、接触経験、ボランティア経験、講習参加が多くなるほど、知的障害者に対する好意度が高くなることが見出されたが、知識においては好意度が高くなるとはいえなかった。

また、性については‘参与意思’と‘能力肯定’それぞれにおいて、女性の方が男性よりも好意的であった。専攻においては‘参与意思’と‘能力肯定’それぞれにおいて、福祉を学ぶ人の方がそうでない人よりも好意的であった。

このように、知的障害者に対する態度には多くの要因が影響していることがわかった。